

元代に於ける立身出世を描く作品群について

——『薛仁貴征遼事略』を中心に——

西川芳樹

一、先行研究と本論の目的

『薛仁貴征遼事略』は、貧民の薛仁貴が唐の征遼に従軍し、張士貴たちの妨害に耐えつつ、手柄を立てて將軍へと登り詰め、敵將莫離支を討ち、遼を平定する顛末を描いた小説である。薛仁貴の征遼故事は、通俗文學の題材として好まれ、多くの作品が作られた。本作もその一つである。また、本作は、全相平話五種や『宣和遺事』などと並び、平話の一つとしても知られている。

本作のテキストは、『永樂大典』卷五二四四「遼」字韻所收のものだけが傳わり、『永樂大典』が依った原本は、未発見である。本論では、『永樂大典』の影印本を用いて論を展開する^①。

本作に關する先行研究を紹介する。中國では、本作の發見者である趙萬里氏が、『永樂大典目錄』「話」字韻に宋元評話二十六卷が著録されるが、本作もこれと同じく評話であり、宋元期の説話人の作であろうと推定した。譚正璧氏は、本作の冒頭と、薛仁貴を題材とした明成化說唱詞話の一つ『薛仁貴跨海征遼故事』の冒頭の字句が一致することから、兩作の關係を指摘した。程毅中氏は、物語の大半が史書に

記載のない虚構であると指摘した。さらに、羅篋玉氏は、『三國志平話』などの平話作品と比べて虚構の占める比率が多く、英雄傳奇の先驅的作品であると述べた。

日本では、橋本堯氏が、神話學の角度から本作が英雄武勳譚と英雄出世譚の要素を併せ持つと論じた。高橋文治氏は、隱伏などの共通點を根據に、本作と元刊本「薛仁貴」劇が同一の祖型を持つと述べた。大塚秀高氏は、劍神という視點から分析を加え、尉遲敬徳が薛仁貴を救う場面を「先代の劍神が次代の劍神を救う話」であるとの見方を示した。千田大介氏は、薛仁貴故事を平話系、詞話系、雜劇系に分類し、『薛仁貴征遼事略』を平話系へ配當すべきとし、さらに、地理的に南方系の要素を持つと指摘した。竹内眞彦氏は、本作の薛仁貴と『三國志演義』の呂布の武具が共通し、兩者が弓の名手であることから、その祖型に李廣の形象があるとの見解を示した^②。

様々な角度からなされている『薛仁貴征遼事略』の研究ではあるが、『永樂大典』が基づいた原書の成立時期に關する議論がとりわけ盛んである。趙萬里氏は、芙蓉城の故事を踏まえた場面に注目し、この故事が雜劇で多用されることから、原書は元代の成立であろうと

推定した。胡士瑩氏は、本作と『武王伐紂書』との開頭詩の一致を根據に、趙氏の元代成立説を支持した。譚正璧氏は、元代から『永樂大典』が編纂された永樂六年（二四〇八年）の間の成立とした。高橋文治氏は、「萬戸侯」、「諸路都總管」、「根底」、「把似」の語彙を根據に、「明らかに元代の小説に出る作品である」と述べた。陳汝衡氏は、南宋成立説を唱えた。作中の地名「美良川」が、元刊本「單鞭奪槊」劇と元刊本「三奪槊」劇では「美良川」に作るが、清代『說唐全傳』では「美良州」に作る。また、同じく地名の「榆窠園」が、「三奪槊」劇では「榆窠園」に作るが、清代『隋唐演義』では「五虎谷」、「說唐全傳」では「御果園」に作ることから、本作は元雜劇に近い宋元代に作られたと推定したのである。程毅中氏は、胡氏が指摘した『武王伐紂書』との開頭詩の一致を根據に、金代成立説を新たに提出した。

さて、多方面から研究が進められる『薛仁貴征遼事略』ではあるが、薛仁貴の人物像が示す本作の特徴と、その特徴がいかなる時代の文學の性格を反映しているかについて、まだ十分に議論がなされていないように思われる。そこで本論では、薛仁貴像を軸に薛仁貴故事の描かれ方を比べ、本作の特徴を示し、この問題について考察したい。

二、薛仁貴を題材にした作品

歴史上の薛仁貴の事績は、『舊唐書』卷八十三、『新唐書』卷一百十一に記される。その内、『新唐書』には、二つの英雄傳の要素を持つ記事がある。一つは、高句麗征伐で軍功を擧げ、貧賤から將軍へと登り詰める立志傳である。もう一つは、天山にて三矢で三人を討ち取り、敵を降伏させた三箭定天山の武勇傳である。

後者は、唐代から詩歌に詠まれ、『新唐書』に「將軍三箭定天山、壯士長歌入漢關」と、軍中で歌われたとの記事がある。また、白居易が「答箭鏃」詩に「不然學仁貴、三矢平虜庭」と詠み、さらに、唐末の王槩は、「三箭定天山賦」という三箭定天山そのものを題材とした賦まで書いている。以後も、詩歌の世界では、薛仁貴は三箭定天山の英雄として語り繼がれてゆく。これに對し、高句麗征伐の故事は、管見の及ぶ限り、詩歌から檢出できない。

一方、通俗文學の世界では、立志傳に取材した作品が数多く作られた。元明期に成立した白話文學作品を列擧すると次の通りである（括弧内は本論で用いる略稱）。

- 1、『薛仁貴征遼事略』 平話（『事略』）
- 2、「薛仁貴衣錦還鄉」 雜劇（『薛仁貴』劇）
- 3、「摩利支飛刀對箭」 雜劇（『飛刀對箭』劇）
- 4、「賢達夫龍門隱秀」 雜劇（『龍門隱秀』劇）
- 5、『唐薛仁貴跨海征遼故事』 說唱詞話（『故事』）
- 6、『薛仁貴跨海征東白袍記』 南戲（『白袍記』）
- 7、『唐書志傳通俗演義』 章回小説（『志傳』）
- 8、『隋唐兩朝史傳』 章回小説（『兩朝』）

これら八作品はすべて、立志傳に取材するか、あるいは、立志傳に取材した故事を作品の一部に含む。三箭定天山は、作中に盛り込まれる場合もあるが、薛仁貴の數ある活躍の一つに止まり、作品全體の題材にはならない。

三、『薛仁貴征遼事略』の薛仁貴像

薛仁貴故事中の薛仁貴像について、『事略』より検討を始める。『事略』は、プロットの反復により、主題や人物像を強調する手法を取る。この反復表現を用いて強調された薛仁貴像は、本論の目的である『事略』の特徴と大きく關わる。そこで、具體例を挙げて検討することにする。まず、薛仁貴の性格を示す例を二つ挙げる。

莫離支又出馬搦戰。敬德欲出、一將高叫「總管且慢、非總管不英雄、奈昔日建功多矣。敢借這件功與薛仁貴麼。雖不得將令、待活捉莫離支、亦索將功折過。」言訖、一騎馬出、……莫離支曰「無名之將。」仁貴曰「休說舊日功、今得你、可全我大功。」

またもや莫離支が出陣して戦いを挑みます。尉遲敬德が出陣しようとする、一人の武將が大聲で叫びました「總管どの、しばしお待ちください。無論、總管どの英雄ではございますが、いかんせんこれまで立てた功が多うございます。この度の手柄を薛仁貴にお譲りいただけませぬか。ご命令を得られなくとも、莫離支を生け捕りにすれば、その功をもって命令違反が帳消しになりましょう」。言い終わるや、單騎で打つて出ます。……莫離支が「無名の將め」というと、薛仁貴は「過去の功績が何だというのだ。いまお前を捕らえれば、わが大功もあるというもの」と答えます。

人奏帝曰「今有遼兵莫離支、知唐將殺其弟葛全武、親領大兵來也、已臨城下。」仁貴聞報、不辭帝而出帳。

元代に於ける立身出世を描く作品群について

ある者が太宗に奏上します「いま遼軍の莫離支が、唐の將に弟の葛全武が討ち取られたと知り、自ら大軍を率いて来て、すでに城下へ迫っております」。薛仁貴は報せを聞くと、帝に出陣の挨拶もせず軍營を出て行きました。

右の例は共に薛仁貴が出陣する場面である。一例目では、薛仁貴は尉遲敬德に出撃を譲るよう訴え、叶わなければ無許可で出陣して敵將を捕らえ、命令違反と相殺にするという。莫離支は本作の敵役であり、薛仁貴は「只擒莫離支、其功要建（ただ莫離支を捕らえるという手柄だけは立てたい）」と、莫離支を手柄首と狙っていた。このため、軍令違反を犯してでも出陣しようとしたのであろう。二例目では、敵襲の急報が届くと、ただちに飛び出して戰場へ向かう。この他にも、莫離支や遼將が來襲すると、薛仁貴が戰場へ飛び出して行く場面がしばしば見られる。二つの例からは、薛仁貴の戦闘への強い意欲を読み取れよう。また、一例目で、薛仁貴は五度「功」と言う。作中、薛仁貴の「功」を求める姿が繰り返し描かれるが、薛仁貴はその動機を直接語らない。しかし、薛仁貴が盜賊の吳黑達に唐軍への歸屬を説くせりふからその動機が見て取れる。

仁貴曰「將軍相逐同往、稍建功、賞汝富貴、豈不勝盜也。」

（薛）仁貴は言いました「將軍（吳黑達）、共に戦いましょう。いくら手柄を立て、あなたに富が恩賞として與えられれば、盜賊をするよりもよいではありませんか」。

薛仁貴は唐へ歸屬し手柄を立てれば、富貴が得られると説得する。

また、張士貴が薛仁貴の手柄を自分のものと報告すると、

今征遼累建大功、宜加旌賞、可掛三路都統軍印者。

此度の征遼で何度も大功を立てたならば、褒賞を與えねばなるまい、三路都統軍の印を掛けよ。

と、太宗は手柄を認めて張士貴に役職を與えており、功を立てた者が地位と富貴を得るといふ流れが作品内に認められる。さらに、薛仁貴が李道宗に張士貴の不正を告發する際、次のように述べる。

絳州捉了混天大王董達、次洛陽擺行陣、後獻平遼論、用計過海、奪東岸、首登雲梯、攻取榆林城、皆小人之功也。奈張士貴不薦其功、只作義軍小卒、身無微職。託皇叔特薦、倘或重用、某殺身報國。

絳州にて混天大王董達を捕らえ、次いで洛陽で陣立てをし、その後、平遼論を獻じ、計を用いて海を渡り、東岸を奪い、一番に雲梯を登って榆林城を落とした、これはすべて私めの手柄です。残念なことに張士貴がその手柄を推擧しなかつたので、ただの義勇軍の雑兵で、この身には小さな役職すらありません。皇叔（李道宗）さまが特別に推薦してくださり、もし重用されれば、私はこの身を犠牲にしてもお國に報います。

薛仁貴は自分の手柄を並べ、張士貴のために手柄が推薦されず低い地位にあると訴え、推薦するよう李道宗に求める。逆に、本來であれば手柄を立てたれば、推薦を経て、重用されるはずである。

ここから、薛仁貴の戦闘への意欲と功を求める姿は、軍事的貢献の見返りに恩賞を受けて地位と富貴を得ようという、薛仁貴の出世欲を示す表現であろう。なお、富貴の獲得は、平話の聴衆が望むところであり、これが作品に反映されたとも考えられる。それにしても、薛仁貴が戦う理由は、立身出世と富貴の獲得のみにあるのだろうか。ここで、薛仁貴が張士貴たちの謀略に陥り、峡谷に閉じ込められたうえ、火をかけられた場面を見てみよう。

仁貴仰告曰「若某忠心爲國、被唐兵所陷、願天降神靈、表我冤枉。」忽見雲霧竝生、大雨忽作、移時復息、其火已滅。

（薛）仁貴は天を仰いで訴えた、「もし拙者が國に忠義の心を持ちながら、味方の唐兵におとしめられたのであれば、神靈を降し給い、わが冤罪を明らかにしてください」。するとたちまち雲と霧が立ちこめ、にわか大雨が降り、しばらくして雨が止むと、その火はすでに消えていた。

右の例は、天が薛仁貴の忠心を認めて雨を降らせたと讀め、薛仁貴の國家への忠が間接的に示されているといえよう。この「忠心」は、それまでの軍事的貢献を指すとも、個人的利益を捨て國家へ貢献する意味での忠義を指すとも讀めよう。しかし、約四萬字ある『事略』の中で、薛仁貴の形容に「忠」の文字が使われるのはこの一字だけである。また、「報國」の語句も二例が見えるのみである。このため、假に忠義の意味で用いられていたとしても、薛仁貴の忠義の性格は、作中でほとんど描かれていないといえる。

ここで、『事略』の薛仁貴像をまとめると、薛仁貴は、立身出世と

富貴を目指して功名を求めている。一方、薛仁貴の忠義、報國の精神は作中ほとんど觸れられていない。『事略』は、薛仁貴が富貴を目指し、張士貴の妨害に耐えつつ戦う姿を描く。薛仁貴の富貴への欲を強調すべく、立身出世を追い求める性格が付與されたと思われる。

立身出世を求める薛仁貴像は、『事略』が薛仁貴の立志傳を下敷きとする以上、一見注目すべき特徴とまでいえないようにも思われる。そこで、次節で元明期の薛仁貴故事との比較を通じ、『事略』の特徴について明らかにしたい。

四、元明期の作品に於ける薛仁貴像

各薛仁貴故事の薛仁貴像について、特に『事略』で問題となつた立身出世を追求する性格を中心に確認する。併せて作品の描かれ方に關係する薛仁貴以外の登場人物についても適宜紹介する。

四一、「薛仁貴衣錦還郷」劇

張國寶撰。元刊本と『元曲選』本が傳わる。元刊本の刊行時期は、元朝最末期の元統年間（一三三三年～一三三四年）以降の可能性が高いという⁷⁾。一方、『元曲選』本は、明末の萬曆四十三年から四十四年（一六一五～一六一六年）にかけて臧懋循の手で編まれた。臧懋循は、『元曲選』を編纂する際、隨所に改編を加えたという⁸⁾。兩版本を比べると、第一折と第四折で異同が多い。中でも、元刊本に登場する太宗が、『元曲選』本では削除されるか、その役目を徐茂功へと置き換える處置がなされている⁹⁾。版本間に大きな異同がある以上、薛仁貴の性格についても個別に検討せねばなるまい。

次に、梗概を示す。但し、元刊本は白のほぼすべてを抜き、詳細な内容の把握は困難である。そこで、『元曲選』本を用い、梗概を示す。

元代に於ける立身出世を描く作品群について

〔楔子〕薛仁貴は征遼軍に身を投じる。〔第一折〕論功の際、張士貴は、薛仁貴の軍功を自分の手柄と主張する。腕比べで勝ち、薛仁貴は功が認められて官位を得る。〔第二折〕薛仁貴は歸郷するも、私的歸郷の罪に問われる。だが、これは薛仁貴の父が見た夢であった。〔第三折〕薛仁貴は歸郷し、家へ向かう道中、兩親の憐れな暮らぶりを舊友より知らされる。〔第四折〕薛仁貴は家族と再會を果たし、家族は朝廷より官位を授けられる。

〔薛仁貴〕劇は、正末が薛仁貴を演じず、薛仁貴が自らの心情を曲に歌うことはない。そして、元刊本は白をほぼ缺くため、白からも薛仁貴の出世欲は読み取れない。このため、他の登場人物の白を手がかりに薛仁貴の心情を推測せざるをえない。薛仁貴の父である薛大伯は白で、「你休問得官不得官、子早回家些兒者。（おまえ〔薛仁貴〕は、官職を得ようと得まいと構わずに、ただ早く歸つて來るのだ。）」と言う。この白は、出世欲の表れとも取れるかもしれないが、親の氣持ちととるべきでもあり、薛仁貴が立身出世を求めていたとまでは言いきれまい。

元刊本では、右の例のように、間接的に出世欲を示すと読みとれなくもない記述を含めても、薛仁貴の出世欲を示す箇所はごくわずかであり、薛仁貴の出世欲を十分には読み取れない。

一方、『元曲選』本は白が備わり、薛仁貴は自身の心情を直接語る。薛仁貴が從軍の決意を兩親に伝える場面を擧げる。

但博得一官半職回來、改換家門、也與父母倒添些光彩。

わずかばかりでも官職を得て戻りさえすれば、家名を高め、兩親にもいくらかの面目を施せるというもの。

右の例では、薛仁貴は官職を得て、家名を高めることを求めている。ただ、梗概で示したように、「薛仁貴」劇は、薛仁貴が榮達した後のお國歸りを描く劇である。このため、『元曲選』本では、第一折で官位を得るまでは、薛仁貴は、家名を高めるために立身出世を求め、榮達後は、立身出世について語らなくなる。

また、『元曲選』本の薛仁貴は、以下に示すように、從軍する以前から報國の精神も口にする。

您孩兒此去、定要赤心報國、展圖開疆、博個封侯拜將而回、……
せがれめ（薛仁貴）は、この出征できつと真心でもつてお國に
貢獻し、版図を廣げ、侯に封ぜられ將軍に任命されて歸つてま
いります。……

薛仁貴が報國の精神を持ち從軍するならば、『事略』のように立身出世のみを求めて戦うわけではなくなる。

以上、「薛仁貴」劇は、元刊本では、白の多くを缺くため、薛仁貴の心情を十分には把握できない。『元曲選』本では、出世欲を示すと同時に、報國の精神も持つ。そして、「薛仁貴」劇は、榮達後の姿を描く作品であり、出世譚は描寫の中心とはいえないであろう。

四二二、「摩利支飛刀對箭」劇

無名氏撰。脈望館抄内府本のみが傳わる。『也是園書目』「元無名氏」目、『大和正韻譜』、『錄鬼簿續編』に著録され、元人の作という。内府本は、明朝皇室が觀劇する際の上演用臺本で、嚴しい檢閲を経ており、政治風刺、體制批判に當たる表現が削除される傾向にあるという。梗概を示す。

〔第一折〕薛仁貴は征遼軍の募兵に應じる。〔第二折〕張士貴は、難癖を付けて薛仁貴の入隊を拒むも、徐懋功が推薦し、入隊が許される。〔楔子〕高麗の大將摩利支（莫離支の音通）が來襲、薛仁貴と一騎打ちを演じ、摩利支が飛刀を放つと、薛仁貴は矢で飛刀を打ち落とす。〔第三折〕斥候が高麗へ摩利支の敗北を傳え、高麗は唐へ獻上品を送る。〔第四折〕張士貴が薛仁貴の功績を横取りしようと企てるが、徐懋功がこれを防ぎ、薛仁貴は軍功により大元帥となる。本劇は、劇全體が薛仁貴の出世譚を描く。さらに、薛仁貴は出世願望を繰り返して語る。一例として、第一折の【尾聲】を擧げる。

我則要身到鳳凰池、有心待標寫在凌煙閣。
拙者はただ、この身が（官僚となり）鳳凰池に赴くことを望み、
（功臣として顯彰され）凌煙閣に描かれたいとの思いがある。

このような出世願望は、薛仁貴は劇中隨所で語り、「飛刀對箭」劇は、薛仁貴の立身出世を全面に押し出した作品といえる。出世譚と出世を求める薛仁貴像は『事略』と同じであるが、「飛刀對箭」劇の薛仁貴は、『事略』には見られない、國威と皇帝の長壽を祈る曲を歌う。

願吾皇懾夷狄、降邊國、千千年九五飛龍齊天福。願吾皇永坐著宗廟舊、家邦老、萬萬載百二山河壯帝居。〔第二折【尾聲】〕

わが君が夷狄をひれ伏させ、隣國を降し、とこしえに九五の飛龍（たる陛下）の天まで届く福を願う。わが君が、古い宗廟、恒久たる國家に永くおわし、いついつまでも百二の山河が帝都

を盛んにすることを願う。

内府本は、明皇室の観劇用に検閲を経たテキストである。このような曲は、皇族への配慮のため、明代に改編を経て付け加えられた可能性が高からう。

以上、内府本「飛刀對箭」劇は『事略』と同じく薛仁貴の立身出世を描く。また、薛仁貴は國威と皇帝の長壽を祈るという『事略』には見られない性格を持つようになる。

四一三、「賢達夫龍門隱秀」劇

無名氏撰。脈望館内府抄本のみが傳わる。柳迎春を正旦とした旦本。『也是園書目』「古今無名氏」目に著録され、『古典戲曲存目彙考』は「元明間無名氏」に分類する。内府本である以上、検閲と改編を経たテキストと考えられる。

〔楔子〕柳員外の娘である柳迎春は、作男の薛仁貴が薄着で寝ているのを見て、自分の上着を掛けてやる。〔第一折〕柳員外は、醜聞を恐れ、娘を薛仁貴に嫁がせたうえで、二人を屋敷から追い出す。〔第二折〕柳迎春は、賢妻となつて薛仁貴を助け、薛仁貴が高麗征伐に従軍すると、家を守り、薛仁貴の両親に仕える。〔第三折〕柳迎春は、舅たちの食事のために實家から米を借るも、兄夫婦に盗んだと疑われて責められる。〔第四折〕薛仁貴が官位を得て歸郷し、家族と再會する。そこへ敕使が現れ、柳迎春を賢夫人として表彰する。

「龍門隱秀」劇は、薛仁貴の征遼中に家を守る柳迎春の姿に多くの紙幅が割かれる。曲も正旦扮する柳迎春が、

我甘心兒織紡殷勤。待翁姑、居鄉里、孝行和順。定省晨昏。過光

元代に於ける立身出世を描く作品群について

陰待時守分。(第二折【粉蝶兒】)

わたしは進んで紡織に精を出し、舅、姑にお仕えし、田舎に住み、孝行で従順、義父母への挨拶を朝夕缺かさず、本分を守り、時期を待ちつつ日々を過ごす。

と、自らの賢妻ぶりを歌うものが多い。

以上、「龍門隱秀」劇は、薛仁貴の立志傳を、賢妻という視點から捉え直した作品といえよう。その反面、薛仁貴の立身出世譚としての色は薄まり、出世欲の描寫も薛仁貴が白で「成功受賞改家門」と述べ、柳迎春が何度か出世を促す程度である。

四一四、「唐薛仁貴跨海征遼故事」

無名氏編。成化七年（一四七一年）刊。明成化說唱詞話の一¹⁵。先述したように、字句の一致から『事略』との關係が指摘されている。話の大筋は、『事略』と同じく、薛仁貴の從軍から征遼の終結までを描く。しかし、秦懷玉の活躍が多いなど『事略』と異なる點もある¹⁶。

『故事』の薛仁貴も富貴を得るために征遼軍に加わり、結末部分で大將軍になつている。だが、この部分を除けば、薛仁貴が富貴を求め描寫はほとんど見られない。一方、薛仁貴、尉遲敬德、秦懷玉たち、武將の戦闘描寫に多くの紙幅が割かれており、作品全體を通じて、薛仁貴の立身出世譚には、あまり焦點が當てられてはいない。

また、張士貴の妨害もほとんど描かれなくなる。終盤の「薛仁貴告御狀」で、薛仁貴は、太宗に張士貴の不正を告發する。しかし、告發の内容は、征遼の全過程の回想に大半が當てられ、張士貴の妨害にはあまり觸れられない。張士貴の妨害に言及する箇所では、跨海計で海を渡り、對岸を守る敵を討つたと自らの功績に觸れた後、「張士貴

劉總管將臣拿住、又無宣又無敕要斬微臣。(張士貴と劉總管は私を捕らえ、宣も敕もなしに處刑しようとした。)と、張士貴たちが薛仁貴暗殺を企てたと告發する。しかし、告白状で暗殺未遂があつたとされる「太宗過海」、「太宗到遼東海岸」の場面では、張士貴たちの暗殺未遂は一切描かれていない。張士貴の妨害は、立身出世譚に起伏を興える効果を狙つたものと考えられる。武將の軍事的活躍に重心を置いた反面、立身出世の描寫が減少し、それに伴い、立身出世の妨害者である張士貴もあまり描かれなくなつたと考えられる。

以上、『故事』では、薛仁貴の立志傳を下敷きとしながらも、實際には、武將の軍事的活躍に描寫の中心が置かれ、これまでよく見られた張士貴の妨害はあまり語られなくなつてゐる。

四一五、『薛仁貴跨海征東白袍記』

無名氏撰。萬曆年間(一五七三年〜一六二〇年)刊?。別題は『征遼記』。題に「金陵富春堂梓」とある。『風月錦囊』十七卷に『白袍記』の一部とも考えられる内容が収められている。内容は、『事略』と同じく、薛仁貴が立身出世を目指して征遼軍に従い、遼を破り降伏させるまでを描く。内容は、秦懷玉らの活躍や、家を守る柳氏の描寫が盛り込まれるなど、『事略』との相違点もある。

『白袍記』の薛仁貴も、『事略』と同様に出世願望をしばしば口にする。作品冒頭で薛仁貴と柳氏が語り合う場面を例に挙げる。

功名未遇時。交人自嘆、枉自有凌雲志。時運乖蹇難逢也。(合唱)
蛟龍暫避、權時隱藏。管交一日身顯姓名。(旦唱)官人你胸中萬
卷書。何必恁憂慮。一朝開選場。那時金榜題名也。

功名はまだその時を得ておらず、天を突くばかりの志を、空し

く懐くと嘆かせる。時運は拙く、運は開けぬ。(共にうたう)蛟龍は、しばしその身を潜ませて、しばらく姿を隠しはするが、いつの日か必ずわが名聲を鳴り響かせよう。(旦うたう)旦那さま、あなたは胸に萬卷の書物を収めておられます。どうしてそんなに憂慮されるのですか。試験のその日が来たならば、その時は金榜に名を連ねることでしょう。

この他にも、二人は繰り返し榮達の願望を語り、『白袍記』は、薛仁貴が立身出世に積極性を示す作品といえる。ところが、『白袍記』の薛仁貴は、功名一邊倒ではない。「赤心報國顯才能。(赤心をもつて國に報い、才を示さん。)',「急忙趕上救唐君。方顯忠良保駕人。(急ぎ追いつきわが君を救つてこそ、はじめて陛下を守る忠臣であると示せよう。)」と報國の精神についても語るのである。

まとめると、『白袍記』は薛仁貴の立身出世譚である。ただし、薛仁貴は、出世と報國という二つの目的のために戦つており、立身出世の追求に重點を置いた『事略』とは、性格が異なる。

四一六、『唐書志傳通俗演義』

八卷九十節。テクストには嘉靖三十二年(一五五三年)楊氏清江堂刊を用いた。他に唐氏世德堂本、周氏大業堂本、余氏三臺館雙峰堂本、舒載陽本の刊本があるが、大きな異同はないという。一卷の巻首二行目に「金陵薛居士的本」、三行目に「鰲峯熊鐘谷編集」とある。

内容は、太宗李世民的擧兵から、登極、征遼の終結までを描く。薛仁貴は終盤の第七十七節から第八十九節に登場し、その従軍から征遼終結までが描かれる。『志傳』での薛仁貴は、李世勣、張亮、張士貴たちと並び征遼で活躍した二武將であり、『事略』のように、征遼全體

が薛仁貴個人の描寫に當てられてはいない。

『志傳』の薛仁貴も榮達を求めて征遼軍に身を投じる。しかし、『志傳』は、薛仁貴の立身出世譚をそれほど大きく取り上げていない。例えば、薛仁貴が手柄を擧げながら、表彰する場面が描かれないことが二回ある。さらに、唐軍が決定的勝利を得て、最後の論功行賞が行われる場面で、張士貴が、次のように太宗へ諫言する。

朝廷爵祿非可濫及、仁貴功雖有、只依上下封之、則他人亦無過望也。

朝廷の爵位は無闇に與えてはなりません。薛仁貴は功ありと言えど、序列に随い封じてください。ほかの者も過分な望みは致しません。

太宗もこれに従い、薛仁貴は破格の出世をしない。張士貴は、従來の作品では、薛仁貴の出世を妨害する役どころであった。それゆえ、この諫言も妨害であるとする見方もあろう。だが、『志傳』の張士貴は他の場面で薛仁貴に一切妨害を加えておらず、それどころか、

張士貴奏曰「鐵勒九姓部落惟萬家善射、陛下委仁貴進、必能成功」。太宗允奏、即敕仁貴征討萬家兵馬總管。

張士貴は上奏して申し上げます「鐵勒九姓部は、萬家部のみが弓に長けております。陛下は、(薛)仁貴に當たるようお命じください。さすれば、必ずや成功を収めましょう」。太宗は上奏を認め、直ちに薛仁貴を征討萬家兵馬總管に任命する敕を下しました。

元代に於ける立身出世を描く作品群について

と、薛仁貴を推薦し、薛仁貴は軍の役職を得ている。張士貴の諫言は、單に太宗へ向けられたものであり、妨害とは讀めないであろう。薛仁貴が序列に従い爵位を受け、破格の出世を遂げないのであれば、薛仁貴個人の立身出世は大きく描かれていないであろう。一方、薛仁貴は次に示すように、報國の精神についても言及するが、あまり多くはない。

此乃是陛下威望所及、臣有何能。然、寸心報主、未嘗一日有忘。

このこと(薛仁貴の戦功)は陛下の威徳が及ぶおかげであり、

私の力ではございません。しかしながら、陛下に報いんとする

志は、一日たりとて忘れたことにはございません。

薛仁貴の立身出世譚と報國の精神が控えめに描かれた結果、『志傳』では、薛仁貴の性格的特徴があまり見られなくなっている。そして、このことは妨害者の性格を失った張士貴も同じである。

以上、『志傳』は、薛仁貴の出世譚の要素が薄められ、登場人物が没個性化した作品といえる。『志傳』は書名に「新刊參采史鑑」と冠し、歴史書としての意識を持ち書かれた作品である。それゆえ、武將の性格が表面化しにくいと考えられる。

四一七、『隋唐兩朝史傳』

十二卷百二十二回。卷末に「萬曆己未(二六一九年)歲季秋既望金闔書林翼昭山繡梓」の木記あり。卷頭に楊慎の題、林澣の序を有し、各卷卷頭に「東原貫中羅本編輯」、「西蜀升菴楊慎批評」と題す。林序は、『兩朝』の成立について、『兩朝』には原作が存在し、それに各種

書物を加えて新たに編纂したと述べる。さらに、『續修四庫全書總目提要』は、九回から九十一回までが原作に基づき、一回から九回、九十二回から百二十二回は、後に補った部分であるという。

内容は、隋の煬帝の即位から唐末の王仙芝の亂までを扱う。薛仁貴は、第八十三回から第九十回の征遼及び、第九十三回の天山の戦役で登場し、これら戦役で活躍した武將の一人として取り上げられ、薛仁貴個人の活躍を描く作品ではない。

『兩朝』の薛仁貴も富貴を求め征遼軍に加わるが、功名、榮達に對する積極的な描寫はあまり見られない。張士貴の横取りに氣付き、

攻城破敵、累建奇功、又不得重賞。凡百皆被總管冒請去了。

城を攻めて敵を破り、何度も拔群の手柄を立てたが、それでも格別の恩賞に預かれず、すべて總管（張士貴）に横取りされた。

と嘆く場面など、數例があるだけである。また、張士貴の妨害を受けた期間も短い。第八十四回後半で張士貴の旗下となり、第八十六回には、張士貴は横領が露見して誅殺され、薛仁貴は早くも遊撃大將軍に任じられる。これで薛仁貴の目標は叶えられたのか、以降、薛仁貴は出世を求めなくなる。さらに、第九十回の征遼が終結した際の論功は「有功者各各加封」と簡単に記されるのみで、薛仁貴の功績と出世にあまり焦點が當てられていないといえよう。

『兩朝』は、三百年という長い歴史を扱う作品である。そのため政治的事件や戦争を中心に作品が構成され、個人の活躍や細かい心情描寫はあまり描かれない。このように、『兩朝』も歴史書としての意識をもって書かれた作品であつたと考えられる。それ故に、薛仁貴個人

の立身出世譚に對して十分に焦點が當てられなかつたのであろう。

ここまで、『事略』を除く元明期の薛仁貴故事について、人物像と作品内容を絡めつつ見てきた。その結果、『飛刀對箭』劇、『白袍記』は薛仁貴の立身出世譚を描き、薛仁貴の立身願望を確認できた。一方で、『飛刀對箭』劇は、皇帝の長壽を祈り、『白袍記』は、薛仁貴が報國の精神に何度も言及するという『事略』には見られない性格が新たに付與されていた。

「薛仁貴」劇、「龍門隱秀」劇、「故事」は、薛仁貴の立志傳を下敷きにしており出世譚の要素も持つが、立身出世以外に描寫の中心が置かれており、出世譚の色合いが薄い。『志傳』、『兩朝』も作品の一部に立志傳を盛り込んでいるが、歴史書としての意識が働き、登場人物の性格描寫が他の薛仁貴故事と比べて少ない。内容も征遼中の諸將の軍事的活動が中心で、薛仁貴個人の活躍や立身出世に關する記述は少ない。これら五作品は、題材である薛仁貴の立志傳を新たな角度から描いたが、その反面、本來持つ出世譚の要素が薄まり、それに伴い、富貴を求める薛仁貴の性格も薄まっていたと考えられる。

次に、『事略』を含めた薛仁貴故事の變遷についてまとめる。『事略』は、薛仁貴故事の中で、薛仁貴が立身出世のために功名を求める描寫が多く、立身出世の過程を描くことに特化した作品といえる。

「飛刀對箭」劇、『白袍記』は、薛仁貴の立身出世を大きく取り上げるが、他の作品では、時代が下るにつれ多様化が進み立身出世の要素は少なくなる。ただ、『白袍記』でも立身出世を大きく取り上げる以上、元代では立身出世を描き、明代の作品はそうではないとするような、王朝による線引きは適當ではあるまい。元代の作品、そして、元

代に近い作品で立身出世に重點が置かれ、元代から時代が下るにつれ次第に出世譚の要素が薄くなったと考えるのが妥當であろう。

翻つて見れば、『事略』を含む各薛仁貴故事は、共に薛仁貴の立志傳と同じ題材を持つか、もしくは、作品の一部に取り込みながら、それぞれが異なる描き方をしている點が目立されよう。平話は明清代に隆盛する歴史演義の前段階として知られるが、『事略』は單なる後世作品の原型ではなく、獨自の特徴を備えているのである。

五、元代の立身出世を扱つ作品群

さて、薛仁貴故事では、元代を中心に立身出世を描く作品が存在したが、これだけでは、立身出世譚が元代の特徴であり、立身出世を求める『事略』の薛仁貴像が、元代の特徴を反映したというには不十分であろう。そこで、薛仁貴故事以外の元代に成立したと考えられる作品を擧げてこの問題を考えたい。

元代に成立し、なおかつ立身出世を扱う作品を探すと、元刊本「蕭何月夜追韓信」劇（以降、「追韓信」劇と略す）、何煌抄「王粲登樓」劇、元刊本「地藏王證東窗事犯」劇（以降、「東窗事犯」劇と略す）、『三國志平話』がこの條件にあたる。これら作品を取り上げ、その立身出世の描かれ方について検討する。

五一一、「蕭何月夜追韓信」劇

金仁傑撰。元刊本のみが傳わる。以下に梗概を示す。

〔第一折〕韓信は兵法に通じながらも、仕官の機會に恵まれず困窮し、洗濯女に施しを受け、ごろつきに股をくぐらされる。〔第二折〕劉邦に仕えたが重用されず、職を捨て歸國しようとするが蕭何が追いかけて引き留める。〔第三折〕韓信は漢の元帥となり、項羽を討つ策を

元代に於ける立身出世を描く作品群について

示す。〔第四折〕呂馬通が項羽の最期を語る。

第一折から第三折が、貧賤から元帥へと登り詰める韓信の出世譚である。劇で取り上げられる、韓信のまたくぐり、洗濯女の施し、劉邦を見限り逃亡するが蕭何の説得を受け思いとどまる、などの韓信の立身出世に關するエピソードは、『史記』「淮陰侯列傳」にも見える。「追韓信」劇は、これら先行する資料をもとに作られた作品であろう。

五一二、「王粲登樓」劇

鄭光祖撰。脈望館藏『古名家雜劇』本、『元曲選』本、「酌江集」本が現存する。さらに、脈望館藏『古名家雜劇』本には、元刊雜劇を抄寫したと考えられる何煌の書き入れがある。本論ではこの何煌校「王粲登樓」劇を用いた。⁽²⁾以下に、梗概を示す。

〔楔子〕王粲は蔡邕に仕官の世話を依頼する。〔第一折〕蔡邕は王粲の傲慢な性格を改めさせるため故意に冷遇する。王粲は蔡邕を見限り劉表を訪ねる。〔第二折〕劉表は、王粲の傲慢な態度を不快に思い追放する。〔第三折〕劉表が没して出世の糸口が断たれ、王粲は絶望する。そこへ、朝廷より、王粲の萬言書が認められて大元帥に任命される。冷遇は故意であったと明かされ、王粲は蔡邕と和解する。

〔王粲登樓〕劇は、無位無官の王粲が元帥になる出世譚である。劇は多く史書に依據しておらず、「登樓賦」を詠んだという王粲の事績を敷衍し、虚構を混ぜて作られたと考えられる。

五一三、「地藏王證東窗事犯」劇

孔文學撰。テキストは、元刊本のみが傳わる。梗概を以下に示す。〔楔子〕金と對峙する岳飛は救命により歸還する。〔第一折〕秦檜の謀略により、岳飛は無實の罪で處刑される。〔第二折〕地藏神が呆行

者に化け、岳飛謀殺の祕密を知っている、と秦檜に告げる。「楔子」何宗立は秦檜の命令で呆行者の逮捕に向かう。何宗立は地蔵王に逢い、秦檜が冥府の役人に連行されるのを見る。「第三折」岳飛は、皇帝の夢枕に立ち、己の冤罪を訴える。「第四折」二十年後、何宗立が戻り、冥府の裁判で秦檜が罰せられ、岳飛が昇天したことを新帝に報告する。岳飛が秦檜への恨みを述べ、地蔵王が登場する。

「東窗事犯」劇の岳飛像について検討する。第一折、秦檜の謀略のために冤罪で死刑判決を受けた岳飛は次のように恨みを述べる。

消不得上馬金下馬銀、也合教出朝將入朝相。我與恁奪旗扯鼓統兒郎。不能夠列金釵十二行。(元和令)

馬を乗り降りすることの金銀の褒美は得られなくとも朝廷の外では將軍、内では宰相をさせるべき。拙者は陛下のために、兵を率いて、旗を奪い、太鼓を割いた。それなのに、十二列の金釵の美女を並べることができないとは。

また、第三折、岳飛は皇帝の夢枕に立ち次のように訴える。

臣望寫皇閣千年不朽。標青史萬代名留。臣做了個充飢畫餅風内燭。這冤仇怎肯干休。(禿廝兒)

私の願いは、宮廷に描かれて(名臣と顯彰されて、名が)千年朽ちず、歴史書に記されて萬代に名を残すことでした。だが、画に描いた餅のように役に立たず、風前の灯のように立場が危ういことをしてしまいました。この恨み、この恨みを晴らさずにはおけましようか。

右のように、岳飛は、富貴と名譽を得るべきと訴え、同時に、冤罪による死刑への恨みを述べる。「東窗事犯」劇は、恨みを飲んで死んだ英雄の魂を神佛が鎮撫する英雄鎮魂劇の性格を持つ作品とされる²³。それゆえ、『事略』の薛仁貴のように、單純に出世を求めるだけでなく、思いが遂げられない恨みを述べるのである。「東窗事犯」劇は、英雄鎮魂劇の側面を持ちはするものの、岳飛が立身出世と富貴を求めた人物として描かれていることに變わりはなからう。

岳飛故事も薛仁貴故事と同じく通俗文學作品の題材として好まれ、數多くの作品が作られた。これら岳飛故事の變遷については、笠井直美氏の詳細な論考があり²⁴、本論でも笠井氏の論を紹介して岳飛像の變遷を追うことにする。

笠井氏が調査した岳飛故事は、次の通りである。

- 「地蔵王證東窗事犯」劇 雜劇 元末刊?
- 「宋大將岳飛精忠」劇 雜劇 嘉靖²⁵萬曆(一五二二²⁶一六二〇)?
- 「大宋中興通俗演義」小説 嘉靖三十一年(一五五二年)刊
- 「東窗記」南戲 萬曆年間(一五七三²⁷一六二〇年)刊?
- 「精忠記」南戲 萬曆年間(一五七三²⁸一六二〇年)刊
- 「岳武穆精忠傳」小説 天啓七年(一六二七年)刊?
- 「岳武穆盡忠報國傳」小説 崇禎十五年(一六四二年)刊
- 「精忠旗」傳奇 崇禎年間(一六二八²⁹一六四四年)刊?
- 「續精忠」傳奇 崇禎元年(一六二八年)前後刊?
- 「奪秋魁」傳奇 清初
- 「牛頭山」傳奇 李玉(一五九一年?一六七一年?)撰

『如是觀』 傳奇 康熙三十五年（一六九六年）

『說岳全傳』 小説 乾隆年間（一七三六年～一七九六）刊

笠井氏は、これら作品の岳飛像の變遷を追い、次のように述べる。

「東窗事犯」劇、『東窗記』の岳飛は功名、封侯を望み、『大宋中興通俗演義』では、岳飛自身は富貴への欲望を語らないが、部下の激勵などを目的に持ち出すことがある。『奪秋魁』は世に出る前の岳飛を扱う作品で、岳飛も功名を語る。これ以外の作品では、岳飛の出世欲、名譽欲を薄く書く。一方、「東窗事犯」、岳飛没後の物語『續精忠』を除く作品で、岳飛の忠義が強調される、という。執筆者は、笠井氏所擧の作品を確認した結果、笠井氏の意見に同意する。

つまり、岳飛故事は、元代の「東窗事犯」劇で「出世欲」、「名譽欲」が最も強調される。そして、『奪秋魁』を例外とするものの、明代以降の作品では立身出世が次第に薄く描かれる傾向にある。ここから、岳飛故事でも、元代に立身出世を求める武將が存在したことになる。ただし、「東窗事犯」劇は、文字として残された部分では岳飛の冤罪と地藏神による報復を描く作品である。あるいは、岳飛の出世故事は、文字として傳わらぬ部分で描かれていたのかもしれない。

五十四、『三國志平話』

無名氏編。元の至治年間（一三二一年～一三三三年）刊。内容は、冒頭に韓信、彭越、英布が曹操、劉備、孫權へと轉生する話があり、續いて黄巾の亂から三國統一までが描かれ、最後に劉淵が司馬氏の天下を奪う、というもの。

『三國志平話』では、直情的性格の張飛が立身出世について語る。張飛が劉備に、董卓追討軍へ参加するよう説得するせりふを擧げる。

元代に於ける立身出世を描く作品群について

殺了董卓、呂布、落得凌煙閣上標名、強如平原縣爲宰、得箇腰金衣紫、蔭子封妻。

董卓、呂布を殺せば凌煙閣に名が残ることになる。平原縣の長官をするよりも、大臣になって、妻子たちにも祿をもらおうほうがいいぞ。

張飛は、劉備が徐州を得るまでの間、何度かこのように立身出世を勧める。劉備が徐州を得るまでに集中するのは、徐州獲得後、劉備が、何らかの地位にあり、官位の獲得を勧める必要がなくなるためであろう。この張飛のせりふは、『三國志演義』の同じ場面では削られている。張飛の功名への言及は、數例に留まるが、元代の三國故事でも立身出世の要素が取り込まれていた證據である。

「追韓信」劇、「王粲登樓」劇は、従来の歴史故事を立身出世譚へと作り変えた例であり、作品全體が立身出世譚となっている。「東窗事犯」劇、『三國志平話』は、立身出世が主題ではないが、登場人物が名譽欲、出世欲を示す。そして、明代以降の作品では、岳飛、張飛の名譽欲、出世欲に關する記述は抑制、削除される傾向にある。

以上、作品ごとに程度の差こそあるものの、元代に立身出世を扱う作品群が存在しており、元代の多くの歴史故事に立身出世が取り込まれていたと分かる。その範圍は、雜劇、平話といった文學の形態を超えたものであった。立身出世の要素が元代の特徴であるならば、個別の雜劇の成立時期を考察する際の指標となる可能性もあろう。

また、作品全體が立身出世譚である「追韓信」劇、「王粲登樓」劇は、共に卑賤の身から元帥へと出世を遂げており、身分の變遷に共通

點がある。さらに、韓信、岳飛、張飛はいずれも武人であり、武人の立身出世が好まれる傾向にあるといえる。このことは、文人である王粲が武人の長たる大元帥となることから裏付けられよう。²³⁾

そして、『事略』も貧賤より將軍へと登り詰める武人の出世譚であり、立身出世を扱う元代の作品群の一つであろうと考えられる。

六、まとめ

ここまでの議論をまとめる。本論で取り上げた薛仁貴故事は、薛仁貴の立志傳を下敷きに作られるか、もしくは、『志傳』、『兩朝』のよりに、立志傳をその一部に含む。それゆえ、各作品は程度の差はあれ、それぞれが薛仁貴の立身出世譚の要素を持つ。だが、これら作品の中で薛仁貴の立身出世譚に描寫の重點が置かれる作品は、『事略』、『飛刀對箭』劇、『白袍記』の三作のみである。この三作では、薛仁貴は立身出世に對し積極的に描かれている。だが、他の作品では、立志傳に取材しながら、立身出世とは異なる内容に重點が置かれるようになり、これに伴い薛仁貴の出世欲は控えめに描かれるようになる。

歴史故事を題材とした雜劇及び平話は、作品ごとに程度の差はあるものの、立身出世の要素を取り入れており、元代では歴史故事で出世譚が流行していたといえる。そして、『事略』もこの作品群の一つであるうとの見方を示した。ところで、本論第一章で『事略』の成立に複数の説があることを紹介した。元代に立身出世を扱う作品群が存在し、『事略』がその一つならば、『事略』の成立は元代であろうと推定される。

最後に、立身出世を扱う元代の作品群について、一つの假説を示すことで、本論の結びに代えたい。

宋元代の都市繁勝錄に、説話人に關する記載があり、その話藝の分類に「發跡變泰」というものがあつたと記録されている。

説公案皆是扑刀、桿棒、及發跡變態之事。(『都城紀勝』)

且小説名銀字兒如煙粉、靈怪、傳奇、公案、朴刀、桿棒、發發跡參之事。²⁴⁾(『夢梁錄』)

澤田瑞穂氏は、『都城紀勝』の「發跡變態」と『夢梁錄』の「發發跡參」が「發跡變泰」に當するとする。そして、「發跡變泰」の字義を検證し、豊富な用例から、「發跡」は「貧賤より身を起こして出世し、高貴顯榮の地位に昇ること」とし、「變泰」は、不遇が極まると萬事亨通して運勢が開け、榮達に向かう、という意味であり、主人公が「榮達する運命を負うている」という。²⁵⁾さらに、具體例として『古今小説』「史弘肇龍虎君臣會」、「臨安里錢婆留發跡」、「醒世恆言」「鄭節使立功神臂弓」を挙げる。主人公が榮達する運命を負うているという部分は、例示した明代作品より歸納したかと思われるが、發跡變泰は、貧賤より高貴顯榮に登り、不遇より運勢が開け榮達する話である點は間違いないだろう。

ここで、先ほど検討した立身出世を扱う作品群から、主人公の立身出世を描く、『事略』、「追韓信」劇、「王粲登樓」劇を見ると、三作品の主人公は、貧賤より將軍へと登りつめており、身分の變化は、澤田氏の定義に當てはまる。次に、運勢であるが、「追韓信」劇に「天交我不發跡直等到老(天は私を發跡させず、年老いるまでひたすら待たせよ)」、「事略」に「未逢時運且蹉跎(まだ時運が巡り來ず、時を無駄にす

「ごし」とあり、不遇を天や運と結びつける傾向が認められる。また、『事略』は、本論第三章でも例示した、薛仁貴が天に祈ると雨が降り危機を脱する場面が、天運を持つと讀めなくもない。しかし、これが薛仁貴の天運によると作中で明言されておらず、斷言はできない。

以上より、立身出世を扱う元代の作品群は、貧賤より高貴顯榮へと登り詰める点では發跡變泰と同じである。天運については、主人公が運勢により榮達を果たしたとまでは言えないが、境遇と天、運を結びつける考えは確認できた。このことから、立身出世を扱う元代の作品群は、發跡變泰に近い、恐らくは發跡變泰の後繼にあたる作品であろうと考えられる。

また、『事略』は、他の平話作品と比べ虚構の比率が多く、英雄傳奇の先驅的作品と考えられていることは、先行研究の中で紹介した。この他にも、『事略』の薛仁貴個人に焦點をあてた描き方や、楊家將、岳家將といった英雄傳奇を形成する作品が、異民族との戦いを描くことから、『事略』は英雄傳奇の先驅的作品と考えられる。

『事略』をはじめとする立身出世を扱う元代の作品が、發跡變泰に近い性格を持ち、同時に『事略』が英雄傳奇の先驅的作品であるならば、『薛仁貴征遼事略』は、あるいは發跡變泰が英雄傳奇へと移行する中間に位置する作品と考えられるのではなからうか。

注

- (1) 『永樂大典』(中華書局、一九六〇年)
- (2) 「平話」は歌の要素を含まない語り物、もしくは、それに基づく小説のことで、趙萬里氏のいう「評話」とは、「平話」の明代以降に多く用いられた表記である。

元代に於ける立身出世を描く作品群について

- (3) 趙萬里『薛仁貴征遼事略』、「後記」(上海古典文學出版社、一九五七年)、譚正璧『薛仁貴征遼事略』(『古本稀見小説匯考』、浙江文藝出版社、一九八四年十一月所收)、程毅中『薛仁貴征遼事略』(『宋元小說研究』、江蘇古籍出版社、一九九八年所收)、羅筱玉『宋元講史話本——薛仁貴征遼事略』(『宋元講史話本研究』、中國社會科學出版社、二〇一〇年五月所收)、橋本堯『薛仁貴——新しい物語タイプの誕生』(『和光大學人文學部紀要』二二、一九八六年所收)、高橋文治『元刊本『薛仁貴衣錦還鄉』をめぐって』(『東方學』第七十六輯、一九八八年所收)、大塚秀高『小説と物語(續)——物語の構造と變貌——』(『中國古典小説研究動態』第四號、一九九一年所收)、千田大介『薛仁貴故事變遷考』(『中國文學研究』第十七期、一九九一年所收)、竹内眞彦『呂布と薛仁貴——英雄の祖型——』(『未明』一七號、一九九九年三月所收)。
- (4) 版本に關する先行研究は、陳汝衡『宋代說書史』(上海文藝出版社所、一九七九年所收)、胡士瑩『薛仁貴征遼事略』(『話本小說概論』、中華書局、一九八〇年所收)、趙萬里、譚正璧、高橋文治、程毅中諸氏の研究は、注(3)前掲論文を參照。
- (5) 程毅中氏注(3)前掲書。
- (6) 元刊本は『古本戲曲叢刊』第四集所收の影印を、『元曲選』本は、『續修四庫全書』(上海古籍出版社、一九九五年)所收影印本使用。
- (7) 金文京『元刊雜劇三十種』(『未名』三號、一九八三年所收)及び、『元刊雜劇の研究——三奪槊・氣英布・西蜀夢・單刀會』(汲古書院、二〇〇七年)の小松謙「解説」による。
- (8) 臧懋循が改編を加えたことは、明末當時から孟稱舜らの指摘がある。古川幸次郎『元雜劇研究』(岩波書店、一九四八年)、小松謙『中國古典戲曲研究』(汲古書店、二〇〇一年)で實證的に確認されている。
- (9) 高橋文治氏注(3)前掲論文。

- (10) 『古本戲曲集成』第四集(商務印書館、一九五八年)所收影印本使用。
- (11) 傅惜華『元代雜劇全目』(作家出版社、一九五七)及び莊一拂『古典戲曲存目彙考』(上海古籍出版社、一九八二年)を参照。
- (12) 小松謙氏注(8)前掲書「明本の性格」、「脈望館抄古今雜劇」考」。
- (13) この曲は、典故の利用、押韻などの制約があり、登場人物の心情を直接述べたものではないが、作品内容の把握のためにあえて用いている。
- (14) 『古本戲曲集成』第四集所收影印本使用。
- (15) 『明成化說唱詞話叢刊』(上海書店出版社、二〇一一年)を用いた。
- (16) 千田大介氏は注(3)前掲論文にて、内容の差異から薛仁貴作品を三系統に分け、『薛仁貴跨海征遼故事』は三系統を繋ぐ位置にあるとする。
- (17) 『中國戲曲研究資料』第一集(天一出版社)影印本使用。
- (18) 卷頭目録は九十節だが、實際は八卷八十九節。
- (19) 『古本小説叢刊』第四輯(中華書局、一九八七年)所收の影印本を用いた。諸本の差異については、孫楷第「新刊參采史鑑唐書志傳通俗演義八卷九十節」、『日本東京所見小説書目』(人民文學出版社、一九五八年五月所收)及び譚正璧氏注(3)前掲書「唐書志傳通俗演義」項参照。
- (20) 但し、八十九回が二つあり、實際は百二十三回。卷十二の目録には百二十四回まである。
- (21) 『古本小説集成』(上海古籍出版社、一九九一年)所收影印本使用。
- (22) 林序の原文は「前歲遇寓京師、訪有此作、求而閱之、始之羅氏原本。因於假日偏閱隋唐之書所載英君、名將、忠臣、義士、有關於風化者悉編爲一十二卷、名曰『隋唐志傳通俗演義』」。『續修四庫全書總目提要』は『續修四庫全書總目提要(稿本)』(齊魯書社、一九九六年)を用いた。
- (23) 拙論「王粲登樓」劇演變考——何焯氏校記を手掛かりとして——」(『關西大學中國文學會紀要』第三一號、二〇一〇年)
- (24) 田仲一成『中國祭祀演劇研究』(東京大學東洋文化研究所、一九八一年)
- (25) 笠井直美「(われわれ)の境界——岳飛故事の通俗文藝の言説における國家と民族」(『言語文化論集』(第二十三卷第二號、二〇〇二年)及び第二十四卷第二號、二〇〇三年)
- (26) 平話や雜劇が上演された瓦市の運営には軍が大きく関わり、その聽衆に軍人がいたとされる。軍隊と藝能の関係については、金文京「戲」考——中國における藝能と軍隊」(『未名』第八號、一九八九年)に詳しい。また、小松謙「詞話系小説考——『殘唐五代氏演義傳』を糸口にして」(『東方學』第九十五輯、一九九八年)は詞話系小説群の共通點の一つとして史書を顧慮しない歴史ものであることを指摘し、さらに、その軍隊と武人、藝人、アウトローらを主な擔い手とする藝能を文字化したものであるように思われると述べる。
- (27) 『都城紀勝』は『宋史資料萃編』(文海出版、一九八一年)所收影印本を、『夢梁錄』は『知不足齋叢書』(中華書局、二〇〇四)所收影印本使用。
- (28) 澤田瑞穂「發跡變泰」(『宋明清小説叢考』、研文出版、一九八二年)。